

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820017

研究課題名（和文）近代オスマン帝国におけるジャーナリズムの誕生と公共的空間の形成

研究課題名（英文）The Emergence of Ottoman Journalism as a Public Sphere in the 19th Century

研究代表者

佐々木 紳 (SASAKI SHIN)

東京大学・大学院人文社会系研究科・特任研究員

研究者番号：50587938

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代オスマン帝国において、いつ、どのようにしてジャーナリズムが誕生し、それが帝国における公共的空間の形成にいかなる影響を与えたのか、ということの解明を試みた。理論面では、多言語社会としてのオスマン帝国の言論空間を捉えるための新たな枠組みとして「オスマン・ジャーナリズム」という視座を提示し、事例研究として、オスマン・トルコ語新聞『時事通信』（ジェリーデー・ハヴァーディス）の調査をおこなった。

研究成果の概要（英文）：This study is intended to elucidate the process of the emergence of journalism as a public sphere in the late Ottoman Empire. I presented a new framework, Ottoman journalism, to grasp the structure of journalism of the Ottoman Empire as a multilingual society. I also investigated the bibliography and contents of an Ottoman newspaper *Ceride-i Havâdis* (Register of Events) as a case study on Ottoman journalism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2011年度	1,040,000	312,000	1,352,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,110,000	633,000	2,743,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：東洋史

キーワード：東洋史、近代史、オスマン帝国、トルコ、ジャーナリズム、メディア、公共性

1. 研究開始当初の背景

(1) およそ 600 年の長きにわたり、中東・北アフリカ・バルカン半島の大部分を勢力下におさめたオスマン帝国は、多宗教・多民族の国家として知られるとともに、多言語・多文字の社会でもあった。人びとは、トルコ語のほかに、アラビア語、ペルシア語、ギリシア語、アルメニア語、ブルガリア語等を話し、

アラビア文字、ギリシア文字、アルメニア文字、キリル文字等を記していた。なかには、イベリア半島からオスマン帝国に移住したユダヤ教徒の言葉であるスペイン・ユダヤ語（ラディーノ）、またアルメニア文字やギリシア文字で表記されるトルコ語なども用いられていた。そのような多言語・多文字社会としてのオスマン帝国の言論空間もまた、多

元的で複雑な構造を有していたはずである。

(2)ところが、先行諸研究のなかには、オスマン帝国の言論空間をトルコ語とアラビア文字の言論空間と同一視し、近代オスマン帝国のジャーナリズム史をトルコ共和国のジャーナリズム史の前史と位置づけているものが少なくない。「トルコ人」による「トルコ語」のジャーナリズムの歴史に関心を集中させる「トルコ・ジャーナリズム」史観ともいべき視点では、オスマン帝国の多元的言論空間の複雑で動態に満ちた姿を捕捉することはできない。

2. 研究の目的

(1)そこで本研究は、近代オスマン帝国における多元的言論空間を総体的に捉えるための新たな視座を求めて、そもそもいつ、どのようにしてオスマン帝国にジャーナリズムが誕生し、それが帝国における公共空間の形成にいかなる影響を与えたのか、ということを明らかにすることを目標とした。

(2)この課題を考究することで、多元社会たるオスマン帝国の言論空間を、トルコ語とアラビア文字だけの一元的・単線的なものとしてではなく、多種多様の言語・文字で発行された新聞・雑誌などの定期刊行物が形づく多元的・複線的・公共的な言論空間として捉えなおすことが可能となるはずである。

3. 研究の方法

(1)近代オスマン史研究、とくにトルコ共和国時代になって登場したジャーナリズム史研究の通説的視点を、批判的に点検・整理する。これにより、トルコ語とアラビア文字で発行された新聞・雑誌などの定期刊行物だけに関心を集中させる「トルコ・ジャーナリズム」の視点を乗り越え、多種多様の言語・文字で発行された新聞・雑誌を核に形成される言論空間を「オスマン・ジャーナリズム」として仮説定義する。

(2)「オスマン・ジャーナリズム」の視点から近代オスマン帝国の言論空間を捉えなおす事例研究として、1840年から1864年までのあいだに全1212号を発行したオスマン語新聞『時事通信』（ジェリーデー・ハヴァーディス）の収集と分析をおこなう。同時に、同紙の記事・論説の目録を作成する。あわせて、同時代の他の定期刊行物史料も適宜調査・収集し、「オスマン・ジャーナリズム」の実態に迫る。

(3)本研究の外国史研究としての実証性を確保するために不可欠の一次史料たる新聞・雑誌等の定期刊行物史料を収集すべく、史料が豊富に現存するトルコ共和国での史料調査・収集を実施する。同共和国の図書館や研究施設、とりわけイスタンブールのアタテュルク文庫やベヤズト国立図書館、またアンカラの国立図書館では、近年、オスマン時代に発行されたものを中心とする定期刊行物史料のデジタル化作業が進みつつある。本研究では、施設側が提供する史料画像を必要に応じて閲覧・購入するほか、許可を得てデジタルカメラによる個人撮影もおこなう。

(4)本研究の成果は、主として学術雑誌の研究論文と学会・研究会等の口頭発表を通して広く社会に公表する。とくに、ジャーナリズム史やメディア史、また公共圏や公共性についての研究への波及をめざして、他地域・他分野の学会・研究会で本研究の成果を報告する。

4. 研究成果

(1)本研究の議論の骨子は、以下の二点である。

①アラビア文字で記されたトルコ語であるオスマン語で発行された新聞が叢生した1860年代から70年代は、従来の研究では「トルコ・ジャーナリズム」の揺籃期とされてきたものの、この時期はオスマン語新聞を含めた多種多様の新聞・雑誌が出そろった「オスマン・ジャーナリズム」の完成期でもあった。
②この時期に、オスマン帝国に住まう諸集団が形成する種々の公共圏（小文字の公共圏）が、「オスマン・ジャーナリズム」のチャンネルを通して相互に結びつき、より高次の公共圏（大文字の公共圏）に発展した。

(2)オスマン帝国における「新聞」の起源は、18世紀末にイスタンブールのフランス大使館が発行したフランス語新聞に始まり、19世紀初頭のイズミルなどの貿易港で居留民が発行した外字新聞に求めることができる。また、19世紀半ばまでには、帝国内のギリシア正教徒、アルメニア教会信徒、ユダヤ教徒などが自身の文字や言語で発行した相当数の新聞・雑誌が存在した。

(3)1828年にエジプト州の公報『エジプト事報』（ワカーイ・ミスリーヤ）が登場し、1831年にオスマン帝国の官報『諸事暦報』（タクヴィーミ・ヴェカーイー）が発刊されたものの、オスマン語新聞の歩みは概して緩慢であった。1840年にオスマン政府の経済的支援を受けて、イギリス人のウィリアム・チャーチルがイスタンブールで『時事通信』（ジェリー

デイ・ハヴァーディス)を創刊したものの、同紙の経営が軌道に乗り、安定して発行を継続できるようになるのは、クリミア戦争(1853-1856年)の戦況速報で商業的成功を収めてからのことであった。1860年までに発行を継続できたオスマン語新聞は、官報と『時事通信』の2紙に過ぎない。この時点までに「オスマン・ジャーナリズム」の世界に欠けていたのは、ほかならぬオスマン語新聞であった。

(4)官報や『時事通信』は、アラビア文字表記のトルコ語であるオスマン語のほかにも、多種多様な文字・言語で発行された。官報には、アラビア語、ペルシア語、ギリシア語、アルメニア語、フランス語のバージョンがあった。『時事通信』には、アルメニア語版やアラビア語版があった。これは、両紙とも多言語・多文字社会の言論空間たる「オスマン・ジャーナリズム」の存在を意識し、それへの適応を試みていたことを示している。

(5)1860年には、ムスリム・オスマン人のイブラヒム・シナーシー(1826?-1871年)とアーギヤーフ(1832-1885年)が、『情勢通詞』(テルジュマヌ・アフヴァール)なるオスマン語新聞を創刊した。これは、オスマン政府の支援を受けない、オスマン史上初のオスマン語民間新聞である。同紙は従来、「トルコ人」が「トルコ語」で発行した初の民間新聞として、「トルコ・ジャーナリズム」の鼻祖と位置づけられてきた。しかし、上述したように、「オスマン・ジャーナリズム」の世界では、これに先立つ半世紀ほどのあいだに、居留民や非ムスリム臣民が自身の言語・文字で発行した新聞・雑誌の蓄積があった。『情勢通詞』の登場と、それに続くオスマン語新聞の叢生は、それまで「オスマン・ジャーナリズム」の世界に欠けていたオスマン語新聞の空白を埋める出来事であり、この意味で1860年代から70年代は、多元的言論空間としての「オスマン・ジャーナリズム」の世界の完成期と見なしうる。

(6)1860年代以降、オスマン語新聞が叢生することで、「オスマン・ジャーナリズム」は完成期を迎えた。これがオスマン帝国における新聞・雑誌を核とする公共的空間の形成に与えた影響は、以下の三点にまとめることができる。

①オスマン語新聞の叢生によって、新聞数、購読者数、発行部数に量的変化が生じたことは疑いない。これは、トルコ語話者のムスリムによって形成されていた種々の「小文字の公共圏」が、オスマン語新聞を通して「大文字の公共圏」たるオスマン・ジャーナリズムの世界にアクセスする機会が大きく開かれ

たことを意味していよう。

②この時期の「オスマン・ジャーナリズム」における量的変化は、言論の質的变化をもたらしたと考えられる。社会哲学者のユルゲン・ハーバーマスは、公共圏にアクセスすることのできる「公衆」の範囲が拡大することで、種々の利害関係も公共圏に流出するようになり、それが公共圏の質的变化をもたらすと指摘する。同様の状況は、1860年代以降の「オスマン・ジャーナリズム」の世界でも生じたと考えられる。実際、『時事通信』と『情勢通詞』は同じオスマン語新聞として商業的に激しく競合した。また、『情勢通詞』を発刊したシナーシーは、同紙の「創刊の辞」のなかで、オスマン帝国の被支配層である非ムスリム臣民が自由に新聞を発行しているにもかかわらず、帝国の「治者の宗教共同体」たるムスリムのなかで新聞発行事業に携わる者がいないことを嘆いている。「オスマン・ジャーナリズム」の完成は、オスマン社会に住まう多種多様な構成集団のあいだに摩擦や緊張の生じる機会が増加したことをも意味していると考えられる。実態としての「オスマン・ジャーナリズム」の世界は、予定調和的な言論空間ではありえず、諸集団の利害の錯綜する争論のアリーナでもあった。

(7)本研究を通して得た以上の諸成果のうち、近代オスマン帝国のジャーナリズムについての研究史と研究文献の紹介、および「オスマン・ジャーナリズム」の通史の見取り図については、NIHUプログラム、イスラーム地域研究東洋文庫拠点における「オスマン帝国史料解題」の場を借りて、同文庫のウェブサイトで成果を公表した。これは、本研究が新たに提唱する「オスマン・ジャーナリズム」の枠組みを広く社会に発信するのみならず、日本における中東地域をはじめとするジャーナリズム史・メディア史研究に対しても有益な情報を提供しうるものとする。

(8)本研究を通して得た成果を他地域・他分野の研究者に対しても積極的に発信し、意見交換と情報の共有をはかるべく、2012年3月に比較教育社会史研究会で口頭発表をおこなった。同研究会には、教育史・教育学の専門家のみならず、イギリス帝国史やロシア帝国史、またメディア史や公共性研究に携わる研究者も多数参加しており、本研究で明らかにした近代オスマン帝国の言論状況および「オスマン・ジャーナリズム」という視点の有効性を確認するとともに、近代世界全体のなかでのオスマン・ジャーナリズム史の特殊性と普遍性、また歴史性と同時代性を相対的に捉えるための見通しを得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

()

研究者番号：

[学会発表] (計5件)

- ①佐々木紳、多元社会の言論空間と公論形成：19世紀オスマン帝国の場合、比較教育社会史研究会 2012 年春季例会、2012 年 3 月 25 日、お茶の水女子大学。
- ②佐々木紳、1870 年代オスマン帝国の憲政論議、史学会第 109 回大会、2011 年 11 月 6 日、東京大学。
- ③佐々木紳、近代オスマン帝国の知識人と帝国意識、北海道大学スラブ研究センター新学術領域研究第 4 班研究会、2011 年 7 月 9 日、北海道大学。
- ④佐々木紳、近代オスマン人の帝国意識：帝國的知識人としての新オスマン人、日本中東学会第 27 回年次大会、2011 年 5 月 22 日、京都大学。
- ⑤佐々木紳、近代オスマン帝国の議会論とジャーナリズム、財団法人東洋文庫超域アジア研究部門・現代イスラーム研究班 2010 年度合同研究会、2011 年 3 月 6 日、東洋文庫。

[その他]

- ①佐々木紳、新聞 gazete (1870 年代まで)、オスマン帝国史料解題 (財団法人東洋文庫)、2012 年 3 月 28 日、
<http://www.tbias.jp/ottomandocuments/gazete.html>
- ②佐々木紳、雑誌 mecmû 'a/ dergi (青年トルコ革命以前)、オスマン帝国史料解題 (財団法人東洋文庫)、2012 年 3 月 28 日、
<http://www.tbias.jp/ottomandocuments/mecmua.html>
- ③佐々木紳、近代オスマン帝国の知識人と帝国意識 (配付レジュメ)、比較地域大国論集第 7 号、240-249 頁、2012 年 1 月 20 日、
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no07/02_sec02_15.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 紳 (SASAKI SHIN)

東京大学・大学院人文社会系研究科・特任
研究員

研究者番号：50587938

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者